

人と自然と文化にやさしい地域づくり

山口県教育

Education of the Yamaguchi prefecture

明日を拓く — 成果を検証する —

10

令和3年 No.1316



■幼児教育の推進

山口大学大学院 教育学研究科
准教授 川崎 徳子
学校法人小野田めぐみ学園
小野田めぐみ幼稚園 園長 佐野 太
学校法人本願寺萩学園
認定こども園 萩幼稚園 園長 河名 哲雄

■第72回日本連合教育会研究大会香川大会

山口市立阿知須中学校 校長 野村 義徳

■小規模校のよさを生かす

柳井市立伊陸小学校 校長 神田 芳伸

■地域活性化活動助成事業

下関市立名陵中学校 校長 村岡 真樹
萩市立福栄小中学校 校長 井原 良

■わたしの潤い

防府支部 田村 直弘

令和2年度 第73回山口県学校美術展 推奨作品

「わあ～ すーちゃんのシャボン玉 にびいるになった!!」

下松市立潮音保育園 年少(受賞時) みやまの 宮脇 ゆうたけ 優葉

一般財団法人 山口県教育会

〒753-0072 山口市大手町2-18 TEL 083-922-0383 FAX 083-922-5768

URL <http://www.ykoyoikuk.or.jp> E-mail ykoyoikuk@ruby.ocn.ne.jp

明治36年4月第1号 毎月1日発行 発行人 会長：倉増誠彦／編集長：西岡 尚



乳幼児期の子どもの育ちを考える



山口大学大学院 教育学研究科
准教授 川崎 徳子

昨今の地球規模での様々な災害や感染症対策等の課題に向き合う日々は、人間のもつ可能性を問われ続けられているのですが、それらに立ち向かい続ける人間の姿や能力からは、同時にたくましさも感じられるように思います。そして、こうした姿には、それぞれの人の育つ過程があつてこそであると思うと、乳幼児期の子どもへの保育（教育）の質を支える幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成29年3月）の改訂（小学校以降の学習指導要領の改訂と同じく）の方向性とともに、「乳幼児期は、生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期である」とこの意味や、その時期の発達と生活、教育の在り方をあらためて大事に考えていかなければと思うのです。

一方で、乳幼児期の子どもの育ちや教育の重要性については、様々なエビデンスと共に一般的にも目を向けられつつありますが、義務教育ではないこともあり、その生活が時々の社会や経済の動向に関連する保護者の就労状況等に左右されてしまうのが現実です。実際、様々な状況にある保護者やその生活環境を支えるために、多種多様な乳幼児保育施設があり、乳児から就学前までの子どもたちが、そこで生活時間の多く、子どもによつては生活時間の大半を過ごしているのです。

乳幼児期の子どもの遊びや生活する姿に見えるもの

例えば、3歳のA君は、廃材の箱をテープでついたりはさみで切ろうとしたりなど、黙々と何かを作っ

ています。しばらく格闘した後、近くの先生の所へ行き、少し手伝ってもらって思うものを作り上げます。側にいたB君も「ぼくも作りたい」と言つて、箱を探し、先生と一緒に作り上げます。出来上がると、2人でそのアイテム?をもつて園庭へ出かけ、思い思いに動いたりポーズをとったりしています。

幼稚園等でよく見かけるような子どもの何気ないエピソードですが、側で見ていた私自身の体験の実感とともに子どもの視点に重ねながら考察すると、A君もB君も思いついたことを一つずつやり遂げながら、なりきつて楽しむまでに一連の体験があることが見受けられます。そこには、手先を動かして、イメージを形にしていく創造性や集中力、試行錯誤の姿、必要な時に先生を頼るなど人とかかわり、なりたいたいものになるために積み重ねていく活動の連続、情報を活用する力、イメージする動きを身体を動かして表現することなど、この一連の過程の中には、周りの環境と応答し自分とも向き合い必要なものを上手に取り入れながら様々な体験が積み重ねられていることが伺えます。

乳幼児期の子どもの発達と教育、環境

前述のエピソードにも見えたように、乳幼児期の子どもの発達は、日々の生活や遊び全ての姿の中にあります。その発達は、身体的にも精神的にも、また、その構造や機能まで、全てが連動しながら総合的に育っていくものです。そしてそこには、人間形成の基礎、

あるいは、小学校以降の生活や学習の基盤となる発達を支える体験が、特別な活動に限らず、日々の何気ない生活や遊びの中にあるとも言えます。いずれも、子ども自身が能動的に環境にかかわる中で積み重ねられていくものです。

しかし、乳幼児期の子どものほそこに「ある」環境で過ごします。それは、その環境での出会いや体験が、子どもの育ちに大きく影響するということでもあり、その環境を創り出す保育者等、関わる大人に求められていることがそこにあるとも言えます。

この現代に生きる子どもたちの育ちを考える大人として、私自身、大学での教員養成に関わることも、現職の先生方との研究や研修の機会も、子どもの日々の生活の中での具体的な姿を丁寧に捉え、実践のあり方を考えていくことを大事しながら、乳幼児期の大切さ、人間の発達の可能性を伝え続けていきたいと思つています。



幼稚園での研修の様子

一生、叩いてはいけないよ



学校法人小野田めぐみ学園
小野田めぐみ幼稚園
園長 佐野 太

トン、トン、トン。子どもが釘を打つ音が響いています。毎年、年長児は木工室で卒園制作に取り組みます。金槌も釘もおとなが使うものと同じです。生まれてはじめて大工道具に触る子がほとんどです。最初に

使う方や注意点を伝え、目の前で釘を打って見せます。それから子どもは自分の道具と木材を手に取り、動物や汽車を自分の力で完成させます。何日もかけて数十本の釘を打ちます。平頭、丸頭、大きさまざまな釘の打ち方を学びます。同じテンポで黙々と打ち続ける子、勢いよく打って「つかれた」とひっくり返る子、それぞれの個性があつて面白く感じます。慣れるまでは慎重ですが、そのうちに友だちとおしゃべりしたり、よそ見をしたりと集中が切れる時があります。

トン、トン、ドスツ。子どもの動きが止まりました。目を大きく見開き、息をとめてびっくりした表情です。よそ見して金槌で自分の指を打ったのです。打った指を掌の中に抱え、一瞬の不注意が大きな痛みをもたらしたことに愕然としています。



卒園制作 (年長児)

痛み、悔しさ、悲しみ、腹立ち、いろんな感情が子どもの瞳の中で渦のように湧き上がっているのが見えます。「大丈夫かい。指を見せてごらん」。子どもの手をとって包むと、目に涙を浮かべています。

「痛かったね。金槌は便利な道具だけど、使い方を間違えると怪我につながることもあるんだよ。だから一生、人を金槌で叩いてはいけないよ。この痛みを忘れないでね」。

まっすぐに顔を見上げた子どもは深くうなずいてくれました。痛む指をアイシングしながら、しばらくの間、子どもはじつと自分の内面と対話しているように見えました。痛みを負う失敗の経験から、他者を大切にする心の学びにつながったある日の出来事でした。

「いのち」を学ぶ



学校法人本願寺萩学園
認定こども園 萩幼稚園
園長 河名 哲雄

本園の教育目標に、「いのち」を大切にしている子どもを育てる」があります。

春、園庭には雪柳、ヒユウガミズキ、シモツケなど沢山の花が咲きまします。子どもたちは、美しく咲く花を眺め春の訪れを楽しみます。しかし、子どもたちの視線は徐々に下に向かい、草木の根元を掻き分け始めます。「おつた!」「大きいのがおつた」と見つけたのは、ダンゴムシです。子どもたちは見つけた様々な虫をバケツに集めていきます。自分が捕まえた虫を友だちと見せ合い、数の多さ、大きさなどを比べています。まさにこの時、数や比較の概念が芽生えている瞬間です。

子どもたちは見たことのない虫を見つけると、「園長先生、写真撮って」と私のもとに駆け寄ってきます。プリントアウトした虫の写真はクラスに持ち帰り、図鑑を広げて「これかね」「こつちじゃない」と色や形を図鑑と見比べながら、友だちと意見を出し合い、虫の名前を探していきます。

「あつた!」「これやろ!」「ヨモギハムシって名前や」。虫の名前を見つけた時の子どもたちの嬉々とした顔はとても輝いています。

自分たちが見つけた虫を図鑑とにらめっこして、友だちと一緒に見つけ出す活動は、多くの学びを獲得する大切な時間となります。

園では「見つけた虫は必ず元居た場所に戻してあげようね」という約束を大切にしています。

子どもたちは虫探しに夢中になるあまり、虫をバケツに入れたまま：ということが起こります。虫にも大切な「いのち」があり、帰る家があるんだよということをしっかりと伝えることで、捕まえた虫をちゃんと元居た場所に戻し部屋に入っていきます。小さな「いのち」を大切に育つていく姿です。

園では今日も遊びの中で、小さな「いのち」を大切に育つていく姿を様々な学びを獲得しています。



虫探し

紙上大会となりました。学校・家庭・地域の連携分科会での研究実践をご紹介します。

やまぐち型地域連携教育による

学校課題解決への実践

地域連携カリキュラム

「7つのゆめのたね」を通して



山口市立阿知須中学校
校長 野村 義徳



7つのゆめのたねを抱く
「なな美ちゃん」
生徒考案の地域協育ネット・
マスコットキャラクター

8月に開催予定であった第72回日本連合教育会研究大会香川大会が、新型コロナウイルスの感染拡大にと
もない残念ながら紙上大会の中の動画配信となりま
した。その第10分科会「学校・家庭・地域の連携」に
おいて発表した本校の地域連携教育について紹介しま
す。
阿知須地域協育ネット協議会では、昨年度、目指す
子ども像を新たに「ふるさと阿知須を愛し、将来地域
で活躍する子ども」と決定し、その実現に向けて、「地
域連携カリキュラム」7つのゆめのたね」を作成し

図：地域連携カリキュラム

ました。7つのたねとは、図の「あいさつ」「家庭学習」
など、地域ぐるみで育みたい7つの態度や心です。各
項目で、幼稚園・保育園から始まり、それぞれの発達
段階において目標とする姿とそのための手立てを示し、
学校と家庭、地域のそれぞれが連携した取組を行って
いるところです。

そして、今年度の学校と地域の重点課題を「家庭学習」
と設定し、その習慣化に向けて、「メディア・コントロー
ル力の育成」に協働して取り組んでいます。

具体的取組として、夏休みに小中合同教職員研修
会を地域協育ネット協議会と合同で開催し、中学校生
徒会執行部も参加して、「子どもたちのメディア・コ
ントロール力をいかに育むか」というテーマで研修を
行いました。まず、阿知須中生徒会の保健委員長が、
昨年度から取り組んでいる生徒のメディア依存度チェッ
クの結果やその対策について発表し、次に阿知須小古
屋校長先生から、阿知須地域の子どものメディア
利用の実態とネット社会の光と陰について講演をして
いただきました。これを受けて、教職員、協議会委員、
PTA役員、生徒が小グループに分かれて熟議を行いま
した。生徒が日頃感じているメディア利用の便利さ

や困り感、あるいは保護者の悩みなど、それぞれが本
音を出し合うことにより、有意義な熟議を行うことが
できました。

事後のアンケートを見ると、中学生からは、「普段、
大人の方々と話し合う場が少ないから、すぐのために
なった」「親子のコミュニケーションが大切だと私は
思いました」などの意見がありました。協議会委員の
方々からも、「委員だけの話し合いではなく、先生や中
学生の参加、そしてグループ熟議など、とても意義の
ある会だった」「中学生がとてもしっかりしていて、
発言もすばらしかった」などの御意見をいただきました。
今後、生徒会が主体となって「家庭での約束づくり」
を呼びかけたり、地域交流センターの「スマホ教室」
の指導アシスタントとして中学生に募集をかけたたりす
るなど、さらなる取組に発展させていきます。

今後も、学校や子どもたちの課題を家庭や地域と共有し
ながら、その課題解決のPDCAサイクルに地域連携
教育を組み込
み、イコール・
パートナーの
対等性のもと、
子どもの学び
や育ちを共に
支えていきたく
いと思えます。
そして、この
ような地域連
携への変革が、
地域コミュニ
ティの活性化
や教職員の働
き方改革に確
実に繋がって
いくと考えま
す。



熟議の様子

持続可能な未来の海へ



柳井市立伊陸小学校
校長 神田 芳伸

伊陸小キャラクター



「まいか」名称の由来
「神楽舞」…かぐらまい
「伊陸米」…いかちまい
「伊陸小」…いかちしょう

本校の概要

伊陸小学校のある柳井市と対岸の周防大島町の間には大島瀬戸があり、魚介類等の水産物が豊富な地域であるとともに、古くから広島湾と周防灘を結ぶ海上交通の要衝ともなっている。

本校は、海から約10km離れ、周囲は山と農地に囲まれた地域であり、児童（5・6年17名）にとつて、普段は海を意識することなく勉学に励んでいる環境にある。

海洋教育の導入

大島瀬戸は、潮流エネルギーが発生する国内でも有数の場所として知られ、大学等が潮流発電の実験のための調査を行っている。子どもたちの日々の生活が、海とどのように関係しているかを海洋教育バイオニアスクールプログラムを通して、身をもって海や船を体験することにより、地域への愛着を育むようなカリキュラムを進めていくこととした。

海洋教育のねらい

昨今、世界的に問題となっている海洋プラスチックごみについて考察させ、海浜に出かけて漂着ゴミを集めて分類する。生活ごみが海洋生物に負荷をかけていることや清掃活動及び日々の生活行動によって、海の環境保護につながることを学ぶ。また、地域での生活が与える海への影響を知り、持続可能な環境を形成していく心を育むことを目的にする。

育てたい資質・能力・態度

海がそばに無くても、海との関係性を知ることにより、児童が生活する地域もその恩恵を受けていることに気付かせる。そのことによつて、海への興味関心を高め、守り、継承していこうとする態度を育む。

そして、山間部での生活が海に影響を及ぼすことを学習し、主体的に環境問題への取組によつて持続可能な社会を形成していくことのできる資質・能力を育む。

海洋教育の内容

①「海を知る」「海を利用する」

大島商船高等専門学校の協力により、実習船で大島瀬戸の潮流及び船舶の航行状況を体験した。また、同校の操船シミュレーター及び停泊中の練習船を見学した。帰校後、大島瀬戸の潮流を再現する潮流実験用機材を使用し、地形の形状による潮流の強さの違いと発電の仕組みを学んだ。

②「海に親しむ」

水族館の飼育学芸員を講師に招き、実習船で航走した大島瀬戸沿岸で、潮流について学習した。その後、磯の生物を観察することで、その種類ごとに視認状



磯観察

況をカウントして、この海域の豊かさと汚染度合を判定した。

③「海を守る」

県環境アドバイザーを講師に招き、海のごみの発生源のほとんどが陸からであることを知り、続いて海浜で漂着物を確認し、清掃活動を兼ねてゴミの種類を判別した。更に、網を使ってマイクロプラスチックの実物を確認した。

まとめと成果

和歌山市の小学校3校とオンラインによる発表会を実施し、意見交換をした。また、東京大学大気海洋研究所教授により、海洋についての講演をオンラインで実施し、体験してきた学習をより一層深めていった。

小規模校だからこそ、フットワークを軽くして現地視察したり、オンラインによる他校との交流をもつたりして意見交換することにより、自分たちの考えを広げ深めることができた。

今後の展望

瀬戸内海沿岸には人々が生活し、多くの生活ごみなどが発生し海に漂流し、それが清掃されないまま流出し、また沿岸部に漂着するということを繰り返している。

今後の学習では、気象・海象なども含めた環境学習を進め、持続可能な社会の形成者として、ふるさとを愛する態度と主体的に行動する力を育成していく必要がある。



海浜の清掃活動



環境に関するオンライン授業

地域の異校種間連携活性化で 児童生徒一人ひとりの力を伸ばす



下関市立名陵中学校
校長 村岡真樹

はじめに

名陵中学校区の3小中学校（王江・名池各小学校、名陵中学校）は令和4年度に統合され、市内初の小中一貫教育校「名陵学園」としての新たな歴史を刻むことになる。

大きな創設理念の下、多くの教職員が部会に分かれ夢を語り合いながら学校づくりに向かっている。しかし、昨年度、本中学校区小中学校卒業生のうち多くは近隣の中高一貫校や私立校に進学し、生徒数は年々減少しているのが現状である。地域の子どもたちや保護者が望む、魅力ある学校にするために、どのような特色を打ち出して学校づくりを進めていくのかは、本校の抱える大きな課題である。

近隣大学との異校種間連携

開校を数か月後に控えた今は、在籍する目の前の子どもたちの現状とニーズをふまえ、新しい学校の柱にも繋がる取組を、できることから形にしている。習熟状況や学習のペースに応じ個別に支援をすることで、力を伸ばすことができる生徒が多くなる。実践には時間と指導に当たる人員を確保することが課題であった。

この解決に向けて、私が大きな可能性を実感しているのが、市内の大学（梅光学院大学、下関市立大学）との連携である。現在、各大学の教職志望の学生に校内に入ってもらい、

「授業支援」と「補習支援」できめ細かな学習サポートを行っている。学習サポート

支援体制は下図のとおりである。

(1) 授業サポート

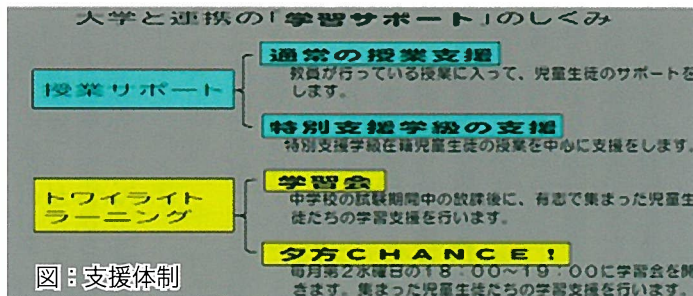
一斉授業で、教師の指示が入りにくかったり、作業が滞ったりする生徒への学習支援を行う。実験や実技・実習が伴う教科や単元では特に成果があがっている。1授業2名程度が学級に入り、通常学級、特別支援学級で机間を回りながら支援を行う。

(2) トワイライトラーニング

これは補充学習を柱にした取組である。以下の2本立てで実施している。

① 学習会

授業の復習や試験対策を中心に行う。中学校のテスト期間中にまとまった補習時間を設定。中学生は主に



試験範囲を、小学生は授業の予・復習を行う。ほぼ、マンツーマンの支援体制が実現している。(写真)

② 夕方 (You gotta) CHANCE!

学びを深めたり、英検への挑戦など高い目標に向けて学習を進めたい生徒への支援を行う。「雲の動きについて深く知りたい」「現在完了を完璧にしたい」など自分の興味にじっくり取り組む時間。英検は大学生の企画運営で今年度中に行う予定である。

日々の教員が行う授業を核にし、それを「授業中の支援」と「授業外の補習」という形で強化することが子どもたちの学力向上に資するものと期待する。

また、各大学とも、学生に対しては担当教授から教育公務員として勤務すると同等の規範意識（守秘や職務専念義務など）と積極的な活動姿勢について指導をしていただき、私も学生にこの取組の主旨等を話させてもらった。

おわりに

学習サポートを継続可能な取組にするためには、「小中・大のwin・win関係の維持」と「成果の実感」が肝要である。ここまですべて取り組んでみて、学習支援だけにとどまらない多様な可能性を感じている。児童生徒一人ひとりに寄り添った、生きた取組として発展させていきたい。



トワイライトラーニング学習会でのマンツーマンの支援体制

ふるさと福栄に学び、福栄を生かす学習 地域の教育資源「ひと・もの・こと」をフル活用



萩市立福栄小中学校

校長 井原 良

はじめに

令和3年度、小中一貫教育校として6年目を迎えた。「地域とともにある学校」として学校と地域が連携しながら、子どもたちのための学校支援、学校の地域貢献等、様々な取組が進められている。本校には特色ある取組として「ふくえ学習」「地域理解学習」がある。これは、ふるさと福栄の「ひと・もの・こと」を活用し、「ふるさと福栄に学び、福栄を生かす学習」である。様々な活動には、地域の方を講師としてお招きし、お力添えをいただいている。地域にとつて、学校が身近な存在になっていると感じている。そこで本校の取組をいくつか紹介する。

一 福栄地域の自然に学ぶ（うなぎの放流）



うなぎの放流

自然に囲まれた福栄地域には、鮎やうなぎの放流ができる豊かな自然がある。地域ボランティアスタッフの協力により実施している。この体験をとおして、水中生物の生態や地形、水質や環境問題について学ぶ機会となり、子どもたちは自分の生まれ育った地域への理解を深めるとともに、ふるさとへの郷土愛を育んでいる。

二 福栄地域の人材に学ぶ（森林体験学習）



森林学習の様子



木製品の製作風景

萩阿武森林組合や市林政課の協力により、森林についての基礎知識から枝打ち、木製品の製作等を体験する。（年間の学習プログラムについて話し合い、見通しをもつて第6次産業体験学習に取り組んでいる。）

三 福栄地域の伝統に学ぶ（大板山たたら太鼓の継承）

福栄地域の紫福地区には、世界遺産の大板山たたら製鉄遺跡がある。その製鉄の力強さをイメージした創作和太鼓に大板山たたら太鼓同好会が取り組み、各種イベントで力強い演奏を披露してきた。本校の児童生徒にとつては、小さいころから地域のお祭りなどで慣れ親しんできた郷土芸能である。その伝統芸能である「大板山たたら太鼓」



ふるさと祭りオープニングにて太鼓披露

を継承し、太鼓を通して郷土愛や自主性・自律性を育むことをねらいとして、現在、小中学生を対象とする公民館活動として「たたら太鼓ジュニア」を開設している。小学4年生から中学3年生までの有志が、毎週水曜日の放課後、地域の方々から熱心な指導を受け、技術を磨いている。その成果は、福栄ふるさとまつりや地域行事等で披露し、地域へ元氣と勇氣を発信している。

四 福栄地域にある事業所に学ぶ（オリーブ畑見学（株式会社ハーベストファーム））



広大なオリーブ畑見学

全児童生徒が毎年、福栄地域を徒歩で探訪し、地域の自然や地理、歴史、産業への理解を深め、ふるさとを愛する心を育成している。探訪ルートや地域内の社会見学する事業所は、地域学校協働活動推進員が中心となり、学校とPTAが連携しながら決定し実施している。

おわりに

学校と地域が連携・協働して子どもたちの学びや育ちを見守ることは、地域の教育力を高め、持続可能な地域づくりにもつながると考える。そのため、学校は「地域に開かれた教育課程」を念頭に入れておかなければならない。子どもたちの学びは、学校だけでなく、地域住民や企業など、様々な専門知識・能力をもった地域人材に関わることで、多様化する社会の中を生きるための必要な知識・能力、主体性の育成につながる。そして、子どもたちには、地域の方との関わりを通して、ふるさと福栄に思いを寄せ、地域の一員として地域活性化に向けて、もてる力を発揮する存在になってほしいと願う。

終わりに、このたび、山口県教育会から「地域活性化活動助成事業」として助成していただいたことに感謝申し上げます。今後、計画している活動を進める中で、有効に活用させていただきたい。

子供自転車に携わって



防府支部
田村 直弘

子供自転車に携わって17年目になります。(右田小2年・大道小4年・佐波小11年)

右田小を最後に退職後は、防府交通安全協会副会長として関わってきましたが、3年前に退会し、今は、子供自転車だけにかかわらせていただいています。幸いにも、たくさんの方々のご尽力を得て、右田小・大道小と5年連続、そして佐波小では3度、全国へ導くことができました。

平成28年度第51回山口県子供自転車大会で優勝し、全国大会へ出場することができました。

現在も関わっている佐波小(さざなみサイクリーズ)にとつて、発足6年目で初めての快挙でした。そしてそれは、防府市制80周年と佐波小学校開校80周年に彩りを添えるものでした。



平成28年度第51回山口県大会

第53回・第54回も県大会で優勝し、全国大会に出場することができました。東京ビッグサイトで47都道府県の代表校と学科テストと実技テストの技を競い合います。

令和2年度は、東京オリンピックの開催で全国大会中止。また、代わりに行われるようになった広



令和元年度第54回全国大会

島での地区大会も県大会も新型コロナウイルスの関係で中止となりました。

本年度も全国大会中止。地区大会は中止。県大会は縮小の形ではありましたが行うことができました。(参加校6校・参加者36名 準優勝でした。)

日頃の練習では、週2回で7月の県大会が近づく4月からは、日曜日も含めて週3回になります。小郡の交通センター(県大会会場)にも数回練習に行きます。

県大会も全国大会も、学科テスト・実技テスト(安全走行と技能走行)の総合計で競います。

子供たちは、これらの活動を通して安全教育と自転車の安全な乗り方をマスターします。きつと手本となってくれることと期待しています。

学校・家庭と地域(佐波地区交通安全協会)と行政(警察・教育委員会)との三位一体で見守る指導体制が、今、ようやく軌道に乗りかけているところです。(主体は交通安全協会ですが)

叱り役・憎まれ役は、教職現場出身の私だと心得て、覚悟して指導していますが、なかなか思い通りにいかない今日この頃です。(鬼の田村が通用しなくなっています。)

現場の先生方の苦勞がよくわかります。そうは言っても、ありがたいことに、退職後も子供たちと関わり続けることができています。

「人を得て、時を得て、事は為る」の我が教育の延長線上を歩ませていただいています。

終身会員の紹介

江原 健二様(大津) 大野 教正様(周新町)

令和3年度 助成事業等一覧

1 現職研修助成……………(合計60件 186万円)

種別	応募件数	採択件数・助成金額
学校研修	57件	53件 165万円
グループ研修	6件	4件 12万円
サークル研修	1件	1件 3万円
個人研修	7件	2件 6万円

2 地域活性化助成……………(合計61件 185万円)

応募件数64件
採択件数・助成金額
2件×4万円……………8万円

3 教育団体研究補助……………(合計6件 60万円)

- 団体の部I
 - ・ 小学校教育研究会……………15万円
 - ・ 中学校教育研究会……………15万円
 - ・ 公立学校教頭会……………15万円
- 団体の部II (全国大会・中国大会等)
 - ・ 中国地区公立学校教頭会研究大会(山口大会)……………5万円
 - ・ 中国地方放送教育研究大会山口(防府)大会……………5万円
 - ・ 山口県へき地教育研究大会……………5万円

4 支部活動振興助成……………(合計8支部1団体22件 64・7万円)

- 《由宇支部》「花いっぱい運動」……………2万円
- 《玖西支部》支部活動活性化事業、他2件……………6万円
- 《周南熊毛支部》「支部だより」の発行……………4万円
- 《防府支部》松陰に親しむ会、他5件……………19・2万円
- 《佐波支部》会員確保の取組……………2万円
- 《吉敷支部》浜村秀雄選手顕彰事業……………6万円
- 《豊浦支部》Face of Face 会員確保事業……………2万円
- 《秋支部》松陰に親しむ会、他6件……………18・5万円
- 【熟年活動支援】
- 山口大学メンネルコールOB会……………5万円

※10月30日開催予定の第48回教育県民大会下関大会は紙上報告となりました。(12月以降HPで公開予定)